



前作に使用した農薬の後作への影響



前作：キュウリの栽培状況



後作：コマツナの栽培状況

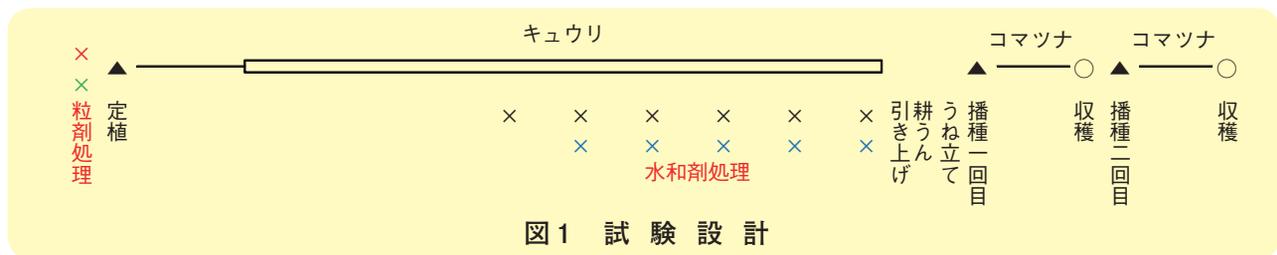


表1 土壌及びコマツナ中の残留農薬濃度

播種日	播種後収穫までの経過日数(日)	農薬処理後経過日数(日)		残留濃度(ppm)							
		粒剤	水和剤	ホスチアゼート		ピラクロホス		プロシミドン		マイクロブタニル	
				土壌	コマツナ	土壌	コマツナ	土壌	コマツナ	土壌	コマツナ
	1回目播種前	147	8	0.14		2.3		0.83		0.16	
H21.2.20	1回目播種33日後	182	43	0.07	0.01	1.5	<0.01	0.18	0.02	0.12	<0.01
H21.4.3	2回目播種27日後	218	79	<0.04	<0.01			0.06	<0.01		

- 注1) 農薬の剤型；粒剤：ホスチアゼート、ピラクロホス、水和剤：プロシミドン、マイクロブタニル
 2) 土壌中の残留濃度；乾土当たりに換算した値
 3) 1回目播種33日後のH21.3.26にコマツナを収穫した後、同場所を耕うん、整地をし同品種を播種
 4) コマツナに対する残留基準値(ppm)；ホスチアゼート：0.1、ピラクロホス：0.05、プロシミドン：5、マイクロブタニル：0.03

2006年5月の農薬ポジティブリスト制度の導入により、農薬の使用が厳しく制限され、ドリフトばかりでなく後作への影響についても心配されるようになりました。そこで、前作キュウリ、後作コマツナの組み合わせで農薬の移行調査をしましたので報告します。

図1に示す通り、前作キュウリの定植前日に2種類の粒剤を土壌処理し、引き上げ前に2種類の水和剤を1週間おきに登録回数散布して、キュウリを引き上げた後、耕うん、うね立てを行い、コマツナを播種しました。コマツナを収穫した後、さらに同じ場所にコマツナを栽培し、それぞれの農薬の残留について調査しました。

その結果、土壌中濃度は、薬剤処理後日数の経過とともに減少しました(表1)。

ピラクロホスとマイクロブタニルは、土壌に残留していましたが、コマツナからは検出されませんでした。ホスチアゼートとプロシミドンは1回目播種のコマツナにそれぞれ残留基準値の1/10および1/250程度の移行が認められましたが、2回目播種のコマツナからは認められませんでした。そのため、両剤とも薬剤処理後日数を確保することで、コマツナへの移行を抑制できることがわかりました。

農薬管理担当では、引き続き他の剤や葉菜類について、後作影響を調査していきます。

(農薬管理担当 青木こずえ 088-863-4915)